Gramona、3段階の自社畑格付け制度を発表

Gramonaは、土壌や微気候、栽培方法を長期的に記録し、ブレンドや単一畑ワインに生かす社内分類制度を導入した

2026年11月18日（水）



スペインのサン・サドゥルニ・ダノイアを拠点とする家族経営のワイナリー、Gramonaは、自社畑の新たな分類制度を導入した。同社によると、土地に関する世代を超えた知見を体系化し、各区画とそこから造られるワインの結びつきをより明確にすることが狙いだ。

同社は11月、新たな枠組みとして、畑を「分類畑」「個性畑」「唯一無二の畑」の3カテゴリーに分けると発表した。この制度は、土壌、微気候、植栽材料に加え、ビオディナミ農法が長期的にもたらす影響を調べた自社畑の区画調査に基づく。Gramonaによると、このモデルは、産地の個性を最も明確に表現するという同社の考えを保ちながら、各ヴィンテージで異なる区画のブドウをどう組み合わせるかを判断するために設計された。

このプロジェクトは、長年にわたる畑での観察を踏まえ、19世紀半ばからワイン造りを続ける家族の取り組みを反映したものだ。Gramonaによると、土壌、農学、ビオディナミによるブドウ栽培の専門家とともに制度を策定した。ワイナリーは、畑の間に固定的な価値の序列を設けることが目的ではなく、各区画の特徴を把握し、醸造の可能性を評価するための分析・管理ツールを構築するこ

とが狙いだとしている。

ワイナリーのテクニカルディレクター兼醸造責任者で、家族の6代目にあたるRoc Gramonaは、長年、実践と経験を通じて理解してきた畑を、より体系的に評価する必要性からこの制度が生まれたと語った。「この分類制度を設ける必要が生じたのは、整理を行い、私たちが自社で取り組む仕事により厳しく向き合い、すでに直感的に行っていたことを改善するためです」と述べた。

新制度の「分類畑」には、Gramonaの見立てで、土壌の組成や構造を安定して表現しながら、収穫年ごとの違いも映し出す区画が含まれる。同社によると、こうした畑は、ワイン造りの中核であり続けるブレンドの基盤となる。異なる土地の表現を組み合わせることで、バランスと複雑さをもたらす役割を担うという。

「個性畑」は、単一の特徴が際立つのではなく、複数の要素が長期にわたり一貫して組み合わさる区画を対象とする。Gramonaによると、こうした畑は土地の個性をより明確に表現し、産地に結びついた強く識別しやすい個性を持つワインを生み出す。

最上位の「唯一無二の畑」は、畑の特徴を最も精緻に表現できるとワイナリーが考える区画を対象とする。Gramonaによると、これらの畑のブドウは、深みや複雑さ、熟成の可能性をもたらす。それでも、単一畑ワインとして瓶詰めするのは、ワイナリーが例外的と判断した年に限るとしており、各区画の最終的な用途は、その年のヴィンテージの出来に左右される。

年ごとの変化を重視する姿勢は、新制度の中核にある。Gramonaは、このモデルを固定的ではなく動的なものと位置づけ、知見を蓄積しながら、気候変動に関わるものを含む栽培条件の変化に対応して進化させていくとしている。Roc Gramonaは、分類が硬直化しないよう意図的に設計したと述べた。「この分類の魅力は、シャンパーニュやブルゴーニュといったフランスの主要産地の制度とは違い、動かない硬直的な仕組みではないことです。各ヴィンテージで特定のワインをブレンドするのに、どの区画が適しているかを評価できる、生きた制度です」と語った。

ワイナリーは、この分類を、畑の個性を守ることを目指す、より広範な栽培方針と結びつけている。同社によると、一部の畑作業では馬を使い、ブドウ樹に直接接ぎ木を行い、自社の植栽材料のみを使用している。また、長期的な畑の管理にビオディナミの原則を取り入れ、現場での直接観察と技術的・科学的な調査を組み合わせているという。

1881年創業のGramonaは、140年以上の歴史を持ち、長期熟成のスパークリングワインで知られる。事業は家族の5代目と6代目が担い、Demeter基準のもと、畑の100％で認証を受けた有機農法とビオディナミ農法を実践しているとしている。また、カタルーニャで設立されたスパークリングワイン協会Corpinnatの創設メンバーでもある。

この新たな分類は法的な原産地呼称の格付けではなく、社内制度だ。しかし、ペネデス地方に深く根を下ろすワイナリーが、伝統と経験に基づいてきた判断を体系化しようとする取り組みを示している。土壌、気候、植栽の選択、栽培方法を判断の中心に据えることで、Gramonaは各畑の特性と、それが収穫年ごとに最終的なワインをどう形づくるかを、より詳細に把握しようとしている。